

発表と討論のまとめ

司会・まとめ 山本剛史（慶応義塾大学）

「ハンス・ヨナスの責任倫理の射程——倫理学の方法論及び限界について」

（演者・兼松誠 （聖学院大学アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程）

2013年1月12日 上智大学）

兼松誠氏はこれまで多年に及び、ハンス・ヨナスの倫理学について、独自の視座から研究を積み重ねて来た。兼松氏の研究は、「赤ちゃん」の思想的意義に関する根深い関心に常に基づいており、今回の発表も例外ではなかった。また今回、兼松氏の研究内容がある程度包括的に披露されていたと見受けられる。発表内容そのものの詳細は発表原稿を元に書かれる論考に譲ることにし、ここには記憶している限りで当日の活発な質疑応答の内容と、僭越ながら司会者である私自身のコメントを記すことにする。

兼松氏は以前、熊本市慈恵病院が全国に先駆けて2006年に設置した「赤ちゃんポスト」が放つ問いかけについて、ヨナスの倫理学に基づいて考察したことがある。今回も「赤ちゃんポスト」に関する言及があったことから、質疑はその点を手掛かりに進行した。その際に焦点となったのは、「赤ちゃんポストに子を預けるということが起こらないようにする方が、責任に対する応答行為としてはより優れているのではないか?『赤ちゃんポストに子を預ける』ことが応答行為として第一に肯定される理由は何か?」という問題だったと思われる。兼松氏の回答は、赤ちゃんポストが必要とされない立法及び行政活動の実施に先陣を切るということは、既に「対象化」された「従来の倫理学」の水準での思考である、というものだった。会員諸兄からは、その場合妊娠してしまったけれども自分では育てられない、育てたくないという人間にたやすい逃げ道を用意することになり、かえって倫理の墮落を招くのではないか、という疑問が呈された。

兼松氏によるヨナス倫理学の解明によると、ヨナスの言う「乳飲み子 Säugling」は倫理学の外部から倫理的な反省に裂け目を生じさせるものである。氏による「実存論的解釈学」に関する詳細な記述を踏まえて考えれば、ヨナスの責任倫理において、フリーライダーは問題にすらならない。こう言ってよければ、相手にされない。また一方で、いわゆる子育て支援策の普及は結果として出来上がってくる倫理であって、それに共同体レベルで注力するのは「当たり前」である。兼松氏がヨナスに見ているのは、「当たり前」の手前にある、「従来の倫理学」と対立しかねない反省以前の責任行為である。それは、「対象化」の結果、共同体にて合意形成を経て改善される倫理に対する外部の源泉である。つまり、人間が独力で生き切ることにはできないという生物学のおよび実存的な「はかなさ Vergänglichkeit」に直面している者の応答である。ただし、赤ちゃんポストも病院という社会的組織が設置するものである以上、純粹に個対個の関係の次元にはおさまりきらない。ここに、兼松氏

と会員諸兄との、あるいは、赤ちゃんポスト設置者と設置を批判する人々との論争の原因がある。

兼松氏の主張を擁護するならば、赤ちゃんポストが社会的装置である分、その存在自体がそれだけ大きな私たちの倫理に対する問いかけであって、存在を批判するよりも、できるなら赤ちゃんポストを廃止できるような社会へと変革することが切に求められている、と解釈できる。つまり、「赤ちゃんポスト」における原 - 責任への応答を改めて「対象化」することを通して、私たちの社会のあり様をよりよくすることが課題となる、と。（「対象化」の意味合いが否定的な側面だけではないことに注意されたい。）

一方で、「乳飲み子」を倫理学の「外部」として設定することによって、「乳飲み子」自体に対する考察が深められない恐れはないだろうか。「乳飲み子」はヨナスの倫理学全体の構想の中で、存在と当為の一致点、自然哲学と倫理学の結節点であって、今後最も考察が深められねばならない巨大な問題である。広く海外へ目を向けても、ヨナス倫理学における乳飲み子の特別な重要性を指摘した研究成果は、Hans Lachenmann, *Sieh hin und du weisst*, Stuttgart, 2009 ぐらいしかない。本邦においては兼松氏がさきがけである。兼松氏には、今後も「乳飲み子」の問題を核に自身の研究を展開・深化してもらいたい。氏の秘めた知と反骨精神に期待したい。